

平成 20 年度

## 病害虫発生予察特殊報 第 2 号

平成 20 年 12 月 25 日  
茨城県病害虫防除所  
TEL：029-227-2445

### キク茎えそ病の発生について

病害虫名：キク茎えそ病

病原ウイルス：キク茎えそウイルス *Chrysanthemum stem necrosis virus* (CSNV)

発生物種：キク

#### 1. 発生経過及び他県での発生状況

- 1) 平成 20 年 10 月，神栖市で，キクの茎や葉に「えそ」が生じ，後に葉が枯れ，激しい場合には茎のえそ部より上位が枯死する症状が発生した。被害株の症状からウイルスによる病害が疑われたため，農業総合センター生物工学研究所において RT-PCR 法による遺伝子診断及び塩基配列の解析を実施した結果，*Chrysanthemum stem necrosis virus* (CSNV) によるキク茎えそ病と同定された。
- 2) キク茎えそ病は，関東地方では千葉県，群馬県，栃木県で発生が確認されている。また，群馬県ではトマトへの感染が確認されている。

#### 2. 病徴

茎に明瞭なえそ症状（図 1），葉には退緑・えそ症状を生じる（図 2）。*Tomato spotted wilt virus* (TSWV) によるキクえそ病によく似ており，病徴からの診断は難しいが，遺伝子診断等により判別が可能である。発病程度は品種によって異なることが報告されている。

#### 3. 病原ウイルスについて

本ウイルスはミカンキイロアザミウマによって媒介され，一度ウイルスを獲得した個体は死ぬまでウイルスを伝搬する（永続伝搬）。感染した株を親株にすると，苗（挿し穂）を介して発生が広がる。管理作業時にハサミや手指等に付着した汁液を介しての伝染は報告されていない。

#### 4. 媒介昆虫について

本ウイルスを媒介するミカンキイロアザミウマ（図 3）は，成虫の体長が 1.0～1.7mm で，幼虫は新芽，花等を吸汁加害した後，土中で蛹になる。羽化して土中から脱した成虫は葉や，特に花を好んで加害する。卵は葉や花の組織内に産みつけられる。寄主植物はキク科，ウリ科，ナス科など極めて広い。20 度では約 20 日間で 1 世代を経過し，1 雌あたりの産卵数は 150～300 個である。低温には比較的強く，野外でも越冬が可能とされている。ミナミキイロアザミウマは本種とよく似ているが，効果のある薬剤が異なるため，両者の同定は正確に行う必要がある。

## 5. 防除対策

- 1) 発生圃場では感染株を抜き取り，二次感染防止に努める。抜き取った株は直ちに土中深く埋めるか，発生圃場で肥料袋等に密閉しておき，腐らせてから処分する。
- 2) 無病の苗を確保する。発生圃場の株は，病徴がみられなくても，ウイルスに感染している疑いがあるので使用しない。
- 3) ウイルスを媒介するミカンキイロアザミウマの防除を徹底する。
  - ・施設の開口部には防虫ネット等を張り，施設内への侵入を防ぐ。
  - ・光反射マルチを利用すると，成虫の忌避効果がある。
  - ・ミカンキイロアザミウマの繁殖場所となるので，施設内外の除草を徹底するとともに，余り苗は速やかに処分する。
  - ・夏季に栽培が終了したときには，1~2週間程度施設を密閉して蒸し込む。
  - ・定植時等に粒剤を処理し，その後は青色粘着シートで発生状況を確認して薬剤防除をする。
  - ・薬剤抵抗性が発達しているので，薬剤の選択にあたっては注意する。

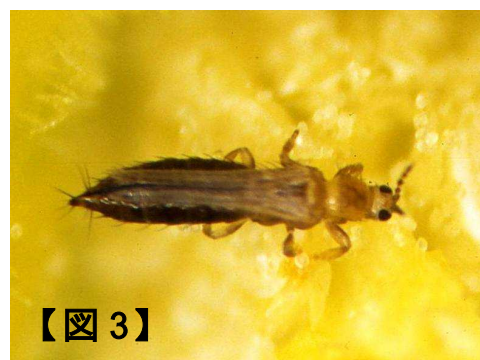


図 1：茎の病徴

図 2：葉の病徴

図 3：ミカンキイロアザミウマ成虫